

認知症の人の 「はたらく」のススメ

～認知症とともに生きる人の社会参画と活躍～



国際大学 グローバル・コミュニケーション・センター
一般社団法人 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ
一般社団法人 人とまちづくり研究所



この冊子は、平成29年度厚生労働省
老人保健健康増進推進事業「若年性認
知症を含む認知症の人の能力を効果
的に活かす方法等に関する調査研究
事業」の成果の中から、認知症の人が
就労や労働よりもより広義の「はたら
く」を実現するために参考になる事例
や知恵を集めたものです。報道や講演
会などで、素晴らしい取り組みの話
聞いたと思っても、いざ自分の地域で
実現しようとする、何かが壁となっ
て同じことは実現できないというの
はよくあることです。その壁は、ある
地域では、制度的なことかもしれま
せん。ある地域では、関係する人た
ちの意識にあるかもしれません。
この冊子でご紹介する、はたらく認
知症の人たちの姿と物語が、皆さんの
地域の壁を突き崩す一助になれば幸
いです。



contents

- p.03-04 認知症の人がはたらく意味
- p.05-06 全国で始まる取り組み(1)
東京都町田市
- p.07-08 全国で始まる取り組み(2)
奈良県桜井市
- p.09-10 広がる取り組み
奈良市・仙台市・沼田市・東京都
- p.11-12 「はたらく」の作り方(1)
東京都町田市
- p.13-14 「はたらく」の作り方(2)
福岡県大牟田市
- p.15-18 インターン企画
はたらくを体感する
- p.19-20 介護事業所ではたらくを
実現するために Q&A
- p.21-22 人生100年時代
「はたらく」の未来

定期的に開かれるレストランで
おかみさんとして働く女性
買い出しから調理、もてなしまでを
担当している(奈良県桜井市)





認知症の人がはたらく意味

「認知症の人がはたらく」と聞くと、多くの人の頭の中に？マークがつかます。

認知症の人や介護サービスを受けている人が、働いて誰かのために役立つたり、時には報酬を得たりするというのは、どういうことなのかと。

また報酬が発生する場合、介護サービスを受ける人が、仕事をして報酬を受け取るのは、おかしいのではないかと思う人もいます。

こうしたことを思う背景には、2つの誤解・思い込みがあります。

ひとつめは、世の中にいる人は、「若くて健康で元気な人」と、「高齢者や病気や障害を持った人」の2種類にきれいに分けることができ、前者は働いて税金や保険料を納めて、後者を養ったり、保護するという考え方です。実際には、ある生活の場面では、サポートがないといけない人が、別の場面では、あっと驚く技術を見せたり、その人でないと果たせないような役割を果たすことができたりするという風景はごく普通に見られます。誰

かのサポートを受けながらも、その人が誰かのサポートをするというのは、ごく当たり前のことであるにも関わらず、平均寿命が短かった時代に作られた制度や風習が、サポートをする人とサポートをされる人に2分する考え方を生み、再強化しています。

ふたつめは、はたらく＝労働市場における賃金労働であるという考え方です。家庭や地域には、賃金報酬を伴わない仕事がたくさんありますし、賃金労働で正社員として働いている人が日々していることの中にも、飲み会の幹事やお茶だしのよいうな契約内容には必ずしも含まれないような仕事もあります。求人情報にのっているような賃金労働という観念をはずして、「はたらく」を、誰かのため、何かのために日々することと広くとらえると、地域の中には、多くの仕事があり、できることがたくさん潜在しています。（もちろん、別の論点として、若年認知症の人で、フルタイムに近い形で会社員として働き続けている人も、数は多くはないものの、実際にいらっしやいます。

今後そうした形で働く人も増えることが期待されます。）

いま、日本では、こうした誤解や思い込みを乗り越えて、認知症の人と一緒にはたらくことを実践する試みが、広がりつつあります。誰かのサポートを受けることもあるけれど、誰かのためにしごととする。ここでしごとをする人々の暮らしは、人生100年時代の後半の新しいロールモデルかもしれません。



一口に、はたらくといっても、内容も様々です。

比較的誰でもできる仕事、得意なことや
かつての経験を活かした仕事、
認知症と共に生きる人だからこそできる仕事。
賃金が発生するもの、謝礼の程度のもの、対価が発生しないもの。
おおまかにタイプを分けると以下のようなものになります。

A

認知症の当事者として できること

講演、当事者の相談にのる、認知症政策を評価する



B

経験を活かして得意なことをする

植木職人が門松をつくる、
商社勤務の人が英語の通訳をする



C

グループでやるとはかどること、 体を使う仕事

ディーラーの洗車、高齢者の家の電球交換



D

その場にいること自体が 価値になること

保育園の子どもたちと一緒に時間を過ごす



E

労働市場にあがってくるような仕事 (正規雇用から内職仕事)

以前からの仕事の継続、ボールペンの組み立て





一人一人の「やりたい」を形にしたら、 「はたらく」だった

——町田市・デイサービス DAYS BLG!

全国で始まる
取り組み

1



町田市のデイサービスDAYS BLG!
(以下、BLG)は、デイサービスを利用

する認知症の人たちが地域へ出て仕事をしてい
ます。近くのホンダの販売店で展示用の車を洗車し
たり、野菜卸業者からの依頼で、業務用の玉ねぎ
の皮むきをしたりと、地域の企業から仕事をうけ
有償ボランティアとして若干の報酬をもらって
います。

この活動がスタートしたのは、代表の前田隆行
さんが前の職場でしていた同様の活動も含めると
12年前。認知症の人が地域へ出かけてはたらくと
いう活動は、全国に先駆けたものでした。

今では、認知症の人がはたらくデイサービスと
して全国的に知られています。前田さんは、最
初から働くとか仕事をするということを目的にス
タートしたわけではないと言います。

「一般的なデイサービスは、お茶を飲んだり、
折り紙や、ゲームをしたりして1日を過ごすこと
が多いと思いますが、利用されている人の中には
そうしたことを望んでいない人もいます。当時利
用されていた若年認知症の男性は、こんなところ
には居たくないと言っていったのです。自
分がもし同じ立場だったら、確かにこの場所には
居たくないと思いました。どうしたら、その人が
居たいと思える場所になるだろうか考えるうち

地域で仕事をとってくる作業は、それほど簡単なものではなく、当初はなかなか仕事を見つけないとができませんでした。前田さんとメンバー（デイサービスを利用する人をBLGではメンバーと呼んでいます）が一緒に、地域の会社などを回るうちに、企業の中にも、こういう仕事はお願いできるのではという話が少しずつ出てきました。ホンダの販売店では、展示用の車をメンバーが平日ほぼ毎日訪れ、洗車をしています。以前は、販売店の社員が全てやっていたのですが、以前に比べ

に、はたらく場があり、その日取り組む仕事があり、一緒に汗を流す仲間が必要と考えたんです。本当に地域や社会に役立つ仕事をしたという気持ちから出発すると、仕事の真似事をするのではなく、地域の企業などから仕事をとってくるという流れになりました。」



代表の前田隆行さん



業務用玉ねぎの皮むき



元植木職人による門松づくり



ホンダ販売店での洗車



人員も少なくなり、BLGのメンバーが洗車をしてくれると非常に助かると言います。この活動に対して、全体として月2万円の謝礼が支払われています。（介護保険制度上は、社会参加活動の有

償ボランティアを行なっているという位置づけ）
前田さんは、「はたらく」とか「就労」というキーワードだけが一人歩きしてしまうのは危険だと指摘します。「BLGでは、一人一人のやりたいことを実現する手段として、仕事があります。毎朝集まった時には、その日取り組むいくつかのしごとや取り組みがあり、どれを試してみたいかという話からスタートします。気分が乗らない場合は、室内でゆっくりしていてもよいと思います。やりたいを実現する中で、はたらくがあり、地域とのつながりがある、という流れが、もつと多くの地域に広がっていけばよいと思います」



ありがとうと言い合える場所をつくりたい

—— 桜井市・デイサービス おたがいさん

全国で始まる
取り組み

2



奈良県桜井市のデイサービス「おたがいさん」では、元皮職人がレザークラフト

を作ったり、元大工が家具を作ったりと、地域と関わりをもって働いたり、なんらかの役割をもつたりする活動をしています。ここを利用する七十代の女性は、かつて多くのお客さんが出入りする家庭に育ち、もてなすことが得意だったことを活かして、デイサービスの食事を作ったり、2ヶ月に一回開かれるBARおたがいさんというお店では、おかみさんとして働いています。デイサービスを利用し始めた当初は、曇りがちの表情でしたが、はたらくことを通じて、今では地域の人たちや他のメンバーを明るくもてなしています。おかみさんとして働いてもらう給料は、自分の子供と外食するために使っていて、生活の張りにもつながっています。

はたらくことに力を入れてるように見えるおたがいさんですが、代表・太田悠貴さんは、就労に特化している訳ではないと言います。「その人にとって居心地のよい場所、自分がいてよいと思える場所を作りたかったんです。そのためには、誰かのために何かをして、ありがとうとお礼を言われたり、お礼を言ったりというような場所にならないといけないと思います。」2年前におたがいさんを開設する前まで、太田さんは、訪



2か月に1回開催されるBARおたがいさん



代表の太田悠貴さん(左)

問介護、小規模多機能、サービス付高齢者住宅などの職場で働いていました。その時に、いつも感じていたのが、介護現場の異様な風景でした。みんなが一斉に折り紙や塗り絵をしたり、風呂場の前に椅子を並べて座ったりしている空間に、自分や自分の親はいたいと思うだろうか。職場で働きながら、いろいろな提案も試みましたが、新しいことをして何か問題が起きたら誰が責任をとるのかと言われました。従来からのやり方に慣れている上司や同僚を説得するのは難しく、いつかは独立して、違和感のない空間を作りたいと思うようになりました。

開設して2年、違和感のない空間を作ろうと様々な試みをしてきた結果、メンバーひとりひとりがそれまでしてきたことや得意なことを活かしたことをするのが自然な流れでした。需要があればどんな仕事でもするというのではなく、メンバーが慣れ親しんできた環境や力でできることから考えるようにしています。

太田さんが、いま一番感じる課題は、自分の事業所というより、ごく一般的な介護職の中にある認知症の人への偏見だと言います。「地域の人は、話せばわかってくれる人が多い一方、介護職の人たちにはこれまでの職業で培ってきた考え方が

あって、認知症の人は何もできない、何も分らないと思っている人がまだ多い。もし、自分が独立していなかったら、今やっている活動の多くは実現できていなかったかもしれない。それだけ、これまでの考え方やこれまでのやり方の力が強いのだと思います。」現場を変えるためには、経営者や現場責任者の役割がとても大きいと言います。「介護の仕事をする人、特に責任を持つポジションの人が、従来の介護の風景に違和感をもって、ひとつひとつを変えていき、ごく普通の生活の風景が広がっていけばよいなあと思います」



地域の子どもたちの見守り活動

認知症の人も参加した 地域再興

—— 奈良・追分梅林プロジェクト

奈良市追分地区は、かつて梅林で有名な観光地でしたが、地域住民が高齢化、梅林も放棄され、衰退の一途を辿っていました。地域の復興をしたいけれど、担い手がいないという住民の悩みに行動を起こしたのが、認知症の人と支援者



梅の収穫



特産品の加工

のグループでした。難しい作業はできないけれど、体を動かすことならばと、放棄された土地を再び整備し、梅を植えていきました。こうした姿に感銘を受けた地元住民、大学、農業関係者なども加わり、現在この場所を拠点に、地域復興の様々な取り組みがスタートしています。



地域の人が集まるウッドデッキ

認知症の人が最初につながる ことができる入り口を

—— 宮城・おれんじドア

認知症の当事者として、経験や思いを語ることで、認知症に関する政策や取り組みに対して意見を発信していくことは、他の人では替わることができない、認知症の人だからこそできる重要な役割・ことです。仙台市のおれんじドアは、認知症の人自身が、認知症の人の話を聞き、お互いに情報交換をしたり、相談をしたりする活動です。おれんじドアは、従来の相談機関や集まりでは、話すことが難しかった悩みや困りごとを話せる場であり、当事者が最初につながるということができる入り口の機能を果たしています。



認知症の本人が認知症の人の話を聞く



グループ法人の中で、雇用や活躍の機会をつくる

—— 群馬・大誠会

群馬県・沼田市（人口4万9千人）で、病院や介護施設を運営する大誠会では、障害者や認知症の人の働く場づくりに積極的に取り組んできました。グループ全体で雇用する人は、およそ500名。グループの中で発生する仕事の一部を、障害者や認知症の人が担っています。内容は、車椅子の修理や農作業など多岐に渡ります。多くのケースは、ボランティアとしての参加ですが、仕事の内容によっては、報酬を支払うケースもあります。ある程度の規模の医療法人や社会福祉法人が地域の雇用の柱になっている地域では、1つのグループの中で、働く側と、仕事を発注する側の役割を同時に担うという事例は、比較的導入しやすい方法のひとつです。



施設で使用する車いすのメンテナンス



特産のリンゴを収穫して販売

認知症の人の「はたらく」姿が伝えるメッセージ

—— 東京・注文をまちがえる料理店

2017年9月、東京の六本木のレストランで、3日間に渡り、注文をまちがえる料理店という企画が開催されました。レストランで接客係として働くのは、すべて認知症の人。注文をした料理と違うものがでてくることもあります。それも含めて寛容な社会を目指していこうという企画です。この企画で働いた人と手をあげた人たちは、普段と違う人たちとのコミュニケーションに緊張も見られつつ、いきいきとした姿で働いていました。日常的な「はたらく」とは少し違った形ですが、いきいきとした姿を通じて社会に伝えるというのひとつの「はたらく」かもしれません。



©森嶋夕貴 (D-CORD)



©森嶋夕貴 (D-CORD)



「はたらく」の作り方(1)

1つの取り組みを、地域全体へと広げる。

東京都
町田市

町田市では、6年前からデイサービスDAYS BLG！(以下BLG)が独自に地域ではたらく活動を行ってきましたが、その後、地域の中で同じような活動をするところは増えませんでした。地域の中で仕事を受けても、量が多くて、BLGだけでは受けることができなかったり、活動に興味を持つ介護事業所が現われても、近場に仕事を発注する企業がなかったりと課題が多くありました。BLGのような活動を地域全体に広げるにはどうすればよいのか、町田市では、市役所とNPO、BLGなどが協働でワークショップを開催し、しごとを発注する側と受ける側、それらを支援・コーディネートする側の人たちのマッチングをすることにしました。

マッチングまでには、次のようなステップを踏んでいきました。



- 1 BLGの課題を話す代表の前田さん
- 2 仕事内容のアイデア出し
- 3 グループワーク

STEP 1
課題を整理する

STEP 2
関心のある人々で集まり、対話を重ねる

STEP 3
アイデアをたくさん出す

STEP 1 課題を整理する

町田市では、BLGが行なっている仕事について、関係者がきちんと理解するところから活動をスタートしました。BLGでも、全ての試みがうまく行っている訳ではなく、納期が厳格で、こちらの体制に比べて量が大きい仕事は、メンバー（認知症の人）の体調や意欲によっては、企業側の要望に答えられず、時には職員が残業して代わりに作業するという事態を招いてしまうことから注意が必要など、大事なポイントを共有しました。

主なポイント

- ① 仕事ならなんでもよいわけではなく、あくまでメンバーがやりたいことであること
- ② 納期や量は、比較的フレキシブルに調整がきくもの（ホンダの洗車は、もともと天気などにも左右される上、絶対に毎日やるという必要はない）
- ③ できること、得意なことを見極めた役割分担
- ④ 時には、他のグループと協働して、仕事をシェアする

STEP 2 関心のある人々で集まり、対話を重ねる

こうしたポイントを踏まえて、町田市では、市役所とつながりのある企業や、個人的につながりのある企業の人、農業関係者などを集めたワークショップを開催しました。ワークショップには、認知症の当事者も数人参加しました。多くの関係者は、認知症の人がはたらくというイメージは持っていないことが多く、BLGの取り組みや、認知症の当事者たちとの話を重ねることで、具体的なイメージを持つようになりました。

STEP 3 アイデアをたくさん出す

対話のワークショップを数回実施した後、仕事を発注したり、生み出すことができる人と、仕事をすることに興味のある当事者や介護関係者が集まり、アイデアを出すワークショップを開催しました。関心の近い人たちをグループ化し、具体的にアイデアを実現するためのステップを考えました。

ワークショップでたアイデア

- ・ スターボックスでの草むしり・食器洗い
- ・ 農林業関係
- ・ 病院や介護施設の車の洗車
- ・ 宅配業
- ・ 見守り活動

2018年2月から認知症の人が竹林ではたらくプロジェクトがスタート

ワークショップの中で生まれたアイデアのひとつが発展して、町田市の所有する竹林の保全活動が始まりました。管理をする手が確保しにくく困っていた町田市と、農林業関係者、認知症の人のグループが協働して、竹林保全をするとともに、今後、タケノコや竹を活用した事業を展開する予定です。町田市では、BLGで始まった「はたらく」取り組みを、地域の中の様々な産業に広がり、様々なコラボを進めていく計画です。





「はたらく」の作り方(2)

もったいないこと、困りごとをうまく組み合わせる

福岡県
大牟田市

大牟田市の場合は、もともと、町田市のBLGのように、単独ではたらく活動をしているところはありませんでした。認知症の人がはたらくというテーマから入るのではなく、「地域のもったいないこと(リソース)」と「困っていること、ニーズ」をうまく組み合わせようという切り口から模索がスタートしました。相談支援包括化推進員(国のモデル事業で設置され、相談支援機関の総合的なコーディネートや新たな社会資源を開発する役割をもつ)が、市内の企業や介護事業所などを回り、話をし、関心が高い人、反応がよかった人を中心に集め、ワークショップを開催しました。

STEP 1 問題意識を共有

相談支援包括化推進員が、まず最初にしたのは、市内の企業や介護事業所を回って、問題意識を説明することでした。企業によっては、なぜ、福祉関係の話に協力しないといけないのかという反応



STEP 1
問題意識を共有

STEP 2
それぞれの困りごと、
余っている
ことを
出し合う

STEP 3
いくつかの組み合わせを
実際に
やってみる

をされることもありましたが、企業の人手不足など、それぞれのセクターで抱えている課題をお互いに持ち寄って解決をしていきたいという問題意識を共有すると、多くの企業が興味を示してくれました。

STEP 2 それぞれの困りごと、余っていることを出し合う

仕事を発注する側の企業や農業関係者、仕事を受ける側の介護事業者の中から、特に関心を強く持った人に参加してもらい、ワークショップを開催しました。認知症の課題ありきではなく、それぞれの業種や立場で、いまどのような困りごとがあるのか、また逆にどのようなリソースが余っているのかを出し合いました。そうした中から、マッチングできる可能性のある組み合わせを見つけることができました。

STEP 3 いくつかの組み合わせを実際にやってみる

ワークショップで出たアイデアは、あくまで粗い想定での組み合わせであり、実際にどのような作業になるのか、どんなことが可能なのかは、実際にやってみないとわかりません。いくつかの組み合わせを選び、試験的にやってみることにしました。

実施



農業

農家では、収穫など人手が不足する繁忙期を中心に、認知症の人や高齢者などが農作業を手伝うことになりました。地域の子供たち、障害者なども加わり、多世代交流へと展開しています。



自動車販売店

町田市での事例を知り、大牟田市でのホンダ販売店でも洗車が始められました。販売会社の社長は、「自分の家族にも認知症の人がいて、できることは積極的にやしていきたい」と言います。

検討中



運送業

人手確保が課題となる中で、地域との協働を考えてきた佐川急便では、介護事業所などと協働できないことがないか検討が始まっています。佐川急便が、介護事業所などの拠点に荷物を運び、そこから先の配送を、認知症の人や高齢者などが担えないかというアイデアも出ています。



花屋

地域の花屋さんでは、花好きの高齢者や認知症の人の力を借りて、できることの模索が始まっています。地域の介護施設と一緒に、草取り、水やりをしています。将来的には花を生けて、商品づくりも検討しています。



インターン企画 はたらくを体感する

意識の壁を乗り越える

今回、各地で関係者に話を聞いていくと、はたらく場をつくるのに、大きな障害となっていることのひとつが、介護の現場で働くスタッフの意識であることがわかってきました。この冊子に出てくる取り組みは、一般的なデイサービスや介護施設などで常識とされることは大きく異なっているのが現状です。

法律の解釈などをめぐり制度上の問題があることも事実ですが、実際には実現できている場所があり、やっている人がいるので、制度上の課題はクリア可能な課題と言えます。どちらかと言えば、それ以前に、介護に携わるスタッフの中で、これは無理という意識上の壁が大きくあるというのが現状です。

調査では、はたらくを実現している2箇所の事業所に、それぞれ別の事業所(将来的にそうした取り組みにチャレンジしたいと考えている)のスタッフが5日間の研修に行き、どのような意識の変化が生まれるのかを見ることにしました。

その1 町田市編

- 1 2 自動車販売店での洗車
- 3 BLGで運営する駄菓子屋



インターン企画 ①

 サービス付高齢者住宅
銀木犀(浦安市、船橋市)



 デイサービス
DAYS BLG! (東京都町田市)

- 5日間現場に入って、職員と同じように働く
- 毎日、業務終了後に、第三者がメンバーとして気づきなどを聞き取る
- 5日間を通じた意識の変化をもとに自分の職場に戻って、実践したいアクションプラン作成



加藤 香さん

東北地方の介護施設に3年間勤めた後、より視野を広げようと、船橋市のサービスタ付高齢者住宅に就職。(介護職員 職歴4年目)

認知症の人と一緒に何かをしていくことの大切さを認識しました

「認知症の人がはたらくというイメージを具体的に持つことができなかったんです。一体どんなところなのか興味があり、今回のインタビンの企画に手をあげました。」

これまで働いてきた介護施設では、重度の認知症の人が多く、どのような思いで、地域へ出て仕事をされているのか、実際に話を聞いて聞くことができたのは、加藤さんにとって大きな収穫でした。

「皆さんの仕事をこなす姿をみて、人の役に立っているということが魅力なのだと感じました。単に、仕事や作業があればよいというのではなく、仕事の先に誰かがいて、社会とつながっていることが実感できる場であることがもつとも大事なことでないでしょうか。」

BLGの風景を見ているうちに、日頃の職場では、どちらかというと、お客さんとして見ていて、できないことをサポートしようという考えが強くなってしまったり、この人は認知症の人という意識が全面にでてしまったりしていると認識するようになりました。もちろんサポートするという場面も必要だと思えますが、二人三脚と一緒に何かをするということも大事だと気づかされました。加藤さんは、インタビンを経て、入居している高齢者と一緒に畑をやって、野菜を地元の人に販売したり、認知症の人と一緒に、介護の仕事の魅力を伝えたりできないかと計画をしています。



串橋 花穂さん

新卒で現在の職場
サービスタ付高齢者住宅に配属。(1年目)

自分が認知症であることを語れることの意味

串橋さんは訪問前、BLGでは利用されているメンバーさんが日常的に自ら認知症であることを語っているという聞き、どうしてそうしたことが可能なのか疑問に思っていました。これまで接してきた認知症の人は、認知症であることを自覚していたとしても、それほどおっぴらに言う人はいませんでした。

「BLGの皆さんの様子にはすごく驚きました。ある日、職員の人から午後5時の予定を忘れてしまったことがありました。その時、すかさず認知症の当事者であるメンバーのひとりが、「認知症は俺なんだから、気をつけなよ」と突っ込んでいました。認知症であることを自覚して、言える雰囲気があったんですね」

BLGと一緒に時間を過ごすうちに、串橋さんの疑問はだんだんと解けていきました。仕事をする中で、認知症であっても、社会とつながっている、人の役に立っているという感覚を持つことができないこと。また、BLGの仲間たちの間には、たとえ、何かを忘れたとしても、お互いにフォローしあうような関係性がありました。

「単に仕事があればよいということではなく、地域とのつながりや役割があつて、それを一緒にする仲間がいて、認知症になっても自分はやれるという感覚を持てることが大事だと認識しました。職場に戻ったら、仲間と場を作っていけるようにチャレンジしたいと思います。」



その2
桜井市編

桜井市のデイサービス・おたがいさんには、
大阪の介護事業所管理者と現場職員の二人が参加し、
5日間をインターンとして過ごしました。

インターン企画②



- 5日間現場に入って、職員と同じように働く
- 毎日、業務終了後に、第三者がメンバーとして気づきなどを聞き取る
- 5日間を通じた意識の変化をもとに自分の職場に戻って、実践したいアクションプラン作成



古田 倫崇さん

法人係長・デイサービスの実質的な管理者。
現在の仕事は、相談員業務や
スタッフ管理などの事務的な仕事が多い。

本人やスタッフの能力をよく知ることが必要

古田さんは、これまで管理者として、座学の研修で自立支援について学んできましたが、実際に職場ではスタッフにうまく伝えることができずにきました。今回現場に5日間居られるというのは、とても貴重な機会で、楽しみにしていたと言います。

「利用者にサービスを提供するのではなく、全体的にとっても自然な雰囲気で印象に残りました。昼食は、その場で食べたいものを考えて準備するし、買い物は、デイサービスとしての買い物ではなくて、一人一人が、普通に買いたいものを買う。一番驚いたのは、デイサービスの利用者が、別の利用者を迎えに行く風景でした。スタッフの勤務や運営ルールなど、どのよう

なっているのか気になりましたが、ごく自然なことを自然にやっているだけという空気でした。」

就労に関しても、無理して仕事を探してくるというのではなく、地域との関わりが継続する中で、(手伝ってくれる)戦力として認識されているので、声がかかるといふ流れ。地域で普通に暮らしている中に、仕事があることを認識したと言います。

「当たり前のように見える光景をつくるには、本人ができることを、スタッフがアセスメントできること。そして、管理者の自分は、スタッフがそうしたことをうまくできるように、スタッフの性格や能力もきちんと見ていくことが必要だと改めて感じました」



福田 雅子さん

デイサービス職員(パートタイム)勤務11年。
現場の利用者と関わる人が多いが、
スタッフの相談も受けるベテラン。

よく考えたら普通のことできていなかった

福田さんは、勤め先のデイサービスでは、退屈している利用者もいるため、もっと利用者のやりたいうことを叶えてあげたいという思いを持ってきました。しかし、職場のルールから外れることをすることは難しく、また、古田さんから自立支援をと言われても、ピンとこず、本当にできるのだろうかと思っていたと言います。

「一緒に時間を過ごしてみても、思ったのは、利用者に職員がサービスしているというよりも、目標に向かって、みんな一緒に何かにチャレンジしているということでした。掃除ひとつとっても、掃除をしてくださいと声をかけるのではなく、夕方になるとみんなで掃除が始まるという感じ。杖をついている方が、

もう片方でモップがけをしている姿は衝撃的でした。」

コンビニに行つて、自分の分や仲間の分のコーヒーを買う、畑で農作業に詳しい人(利用者)がスタッフや他の人に教えるなど、当たり前のことができていなかったことに気づきました。インターン期間の後、自分たちの職場は、日常からは切り離されたデイサービスという特別な空間になっていたのではないか、家にいるような自然な空間にできないかと意識するようになりました。

「自然な雰囲気の中で、ひとりひとりが、自分にもできることがあると思えるような場を作っていきたいです」



介護事業所で

はたらくを実現するために

認知症の人の「はたらく」を実現するためには、
制度上の問題や行政・ケアマネジャー等とのやりとりが
発生する場合があります。すでに起こりつつある事例では、
どのように解消しているのかをQ&A形式でまとめました。

Q&A

Q1

介護サービスを利用する人が、 はたらくてもよいのでしょうか？

A

全国のケースには、介護保険サービス利用中に行われて
いるものと、そうではないものがあります。後者は、介護
保険法等の制約はありませんので、本人の自由にすすめる
ことができます。

町田市や桜井市の例は前者で、地域密着型通所介護サービスの一環
として、メンバーさん（認知症のある利用者）の社会の役に立ちたい
という思いを実現するものとしてはたらく場を生み出しています。

厚生労働省老健局高齢者支援課認知症・虐待防止対策推進室からの
事務連絡（平成23年4月15日）「若年性認知症施策の推進について」では、
社会参加型のメニューを実施する際に発生したボランティア活動の謝
礼受領について、以下の条件をすべて満たす場合に限り差し支えない
とされています。

- ①当該謝礼が労働基準法第11条に規定する賃金に該当しないこと
- ②社会参加型のメニューを提供する介護サービス事業所において、
介護サービスを利用する若年性認知症の方がボランティア活動
を遂行するための見守りやフォロー等を行うこと

なお、ボランティア活動の謝礼は、若年性認知症の方に対するも
のであると考えられ、介護サービス事業所が受領することは介護
報酬との関係において適切でないと考えられることを申し添えま
す。

詳細は、厚生労働省からの通知等で最新情報を参照してください。



Q2

はたらく活動が、介護サービスの一環として行われている場合、ケアプランの中で、どのように位置づけられているのでしょうか？

A

ケアプランの中では、はたらく活動に参加することがどのような意味を持つのかを記載する必要があります。当然、はたらくことならば、何でもよいというわけではなく、その人にとってどのような意味をもつのかを考える必要があります。

例えば、町田市のデイサービスDAYS BLG!では、ケアマネジャーが作成するケアプラン(居宅介護計画書)に、「社会参加活動」と大項目で入れてもらっています。

す。つまり、ケアマネには活動内容をよく知ってもらうことが前提としてあるため、事業所は仕組みを熟知しなければなりません。次に事業所側はケアプランを受け取った後に、通所介護計画書を作成する中で小項目として実際の活動(ホンダでの洗車等)を記入していきます。また活動を実施することで短期目標&長期目標を本人に聞きながら作成し、目標達成したならば評価項目に記入しなければなりません。

Q3

行政(都道府県、市町村)にはどのようなように説明すればよいのでしょうか？

A

特に許可を得る必要はありませんが、一緒に取り組んでいく必要はあります。「どうすれば社会参加活動をしていけるか考えていきたい」という姿勢を伝え、行政とともに方策を検討していくとよいでしょう。

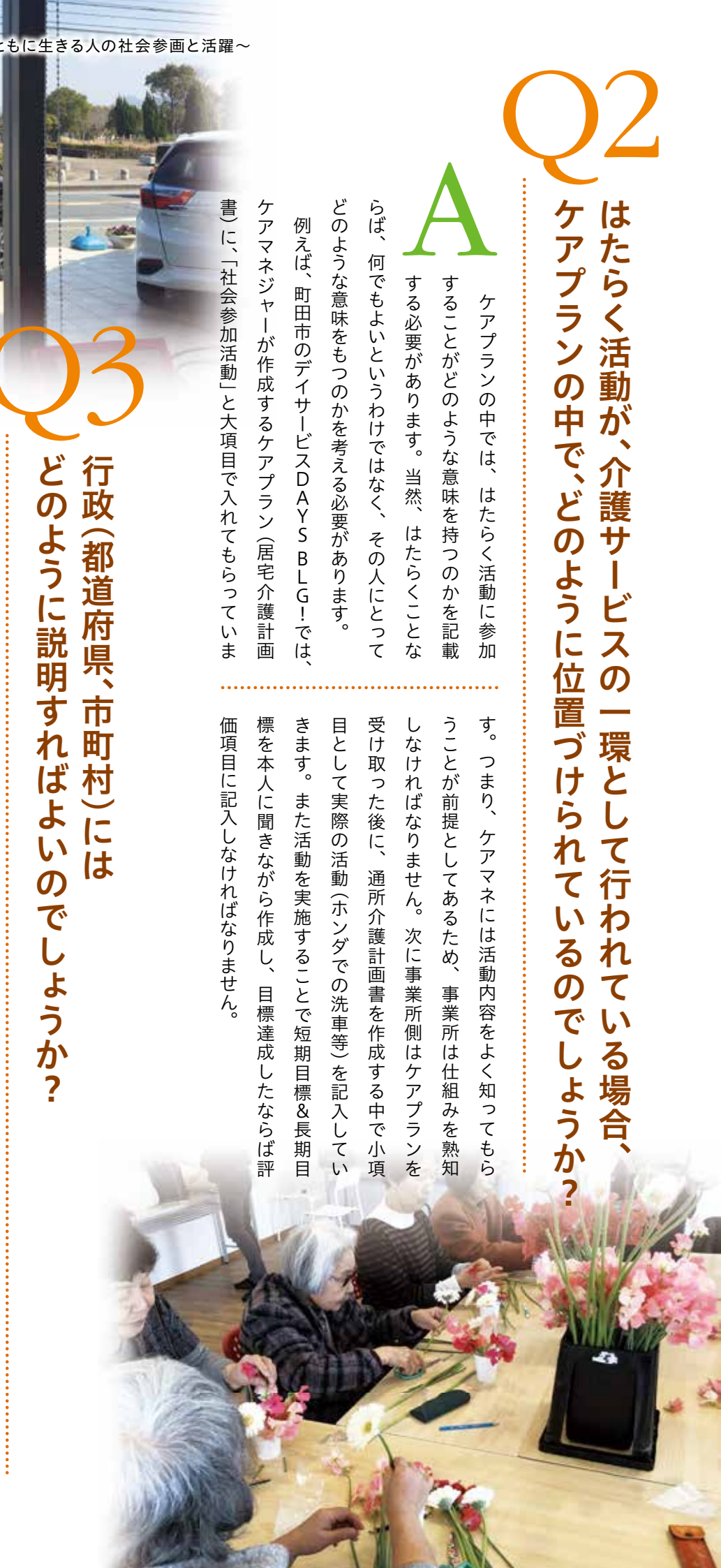
指導を受けた場合には、「自立支援」の意味合いとともに、老人福祉法第一章総則の第三条一項及び二項に記載されていることを伝えます。前述の書類をそろえておくとともに、活動参加前後の変化等を示すことができる写真や動画等の記録

をしていくことも有効と思われます。

【老人福祉法】

第三条 老人は、老齢に伴って生ずる心身の変化を自覚して、常に心身の健康を保持し、又は、その知識と経験を活用して、社会的活動に参加するように努めるものとする。

2 老人は、その希望と能力とに応じ、適当な仕事に従事する機会その他社会的活動に参加する機会を与えられるものとする。





人生100年時代 「はたらく」の未来



今回の調査で訪れた現場には、認知症になってはたらく姿がありました。就労ありきではなく、認知症であってもなくても、その人が居心地のよい場をつくらうとした結果、地域に出ていき、一緒に汗を流す仲間と、誰かのためにする仕事があるという環境が実現されていました。

平均寿命が大きく伸び、人口構成や経済環境が大きく変化する中、財源も働き手も不足しつつある地域社会では、生活課題を抱えた人を、専門家が個別に、手厚く一方的に支援するということが難しくなりつつあります。認知症とともに生きる人が、地域の子どもの見守りをする。一人では十

分な成果が出せない仕事でも、何人かのグループと一緒にやれば十分な仕事がこなせる。何らかのサポートを受けながらも、別のところでは、他の人々の暮らしを支える。いきいきとはたらく認知症の人の姿からは、新しい地域の姿や新しい人生後半の生き方を見出すことができます。



支援を受けつつ、
誰かのためには
はたらくのが
当たり前





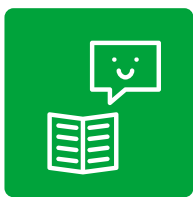
個別アプローチから
地域共生社会へ



雇用は有限だが、
役割は無限



社会の生産性イコール
個々の能力の総和ではない



認知症の人の「はたらく」のススメ

～認知症とともに生きる人の社会参画と活躍～

国際大学 グローバル・コミュニケーション・センター <http://www.glocom.ac.jp/project/dementia/>
一般社団法人 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ <http://dementia-friendly-japan.jp/>
一般社団法人 人とまちづくり研究所

冊子構成・編集：徳田雄人(株式会社スマートエイジング、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター)
冊子デザイン：アルファデザイン